

ドナウの四季

2009年・新春創刊号・No.1

「ドナウの四季」創刊にあたって	盛田 常夫	1
随想 堤一実・小林研一郎・糸見徳・堤功一・佐藤紀子		2
ハンガリー履歴書	盛田 常夫	7
活躍する日本人 「金子三勇士君・長沼敦君」		9
留学生自己紹介		10
収穫の喜び	小松 裕文	12
在留邦人紹介 「広江昭久さん」	小松 裕文	12
コンサート情報	桑名 一恵	13
緑の丘日本語補習学校	ラバイ 里美	14
運動サークル情報 テニス・釣り・ランニング・ゴルフ		15

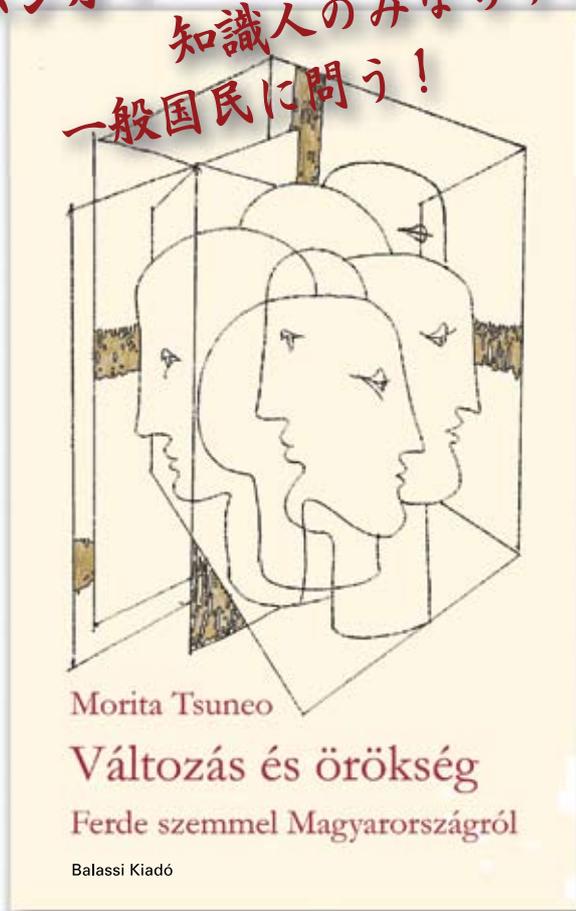
Valtozás (change) és Örökség (legacy)

Ferdeszemmel Magyarországról

ハンガリー人は自らの立場を誤解していないか。外国企業と外国資本に依存し、自立精神を失ったハンガリー人は、「借り物経済」の中で、お客さんのように「ゲストワーカー」になっていないか。政治家はGDPの5割を手中にし、市場経済を「国庫化」する「国庫資本主義」の道を行っていないか。

政権政党のみならず、野党が陥る便宜主義とポピュリズム。借り物経済、ゲストワーカー、国庫資本主義のキーワードで解明するハンガリー社会分析。大反響を呼んだ「国庫資本主義」論を中心にハンガリー社会の病根を抉る。キリギリスから蟻にならなければ、ハンガリーの浮揚はない。

ハンガリーの政治家、
知識人のみならず、
一般国民に問う！



ハンガリー書籍フェア出品作品
4月刊行、予価2600Ft、予約受付中

目次

A rendszerváltás és a magyar társadalom

(第1部 体制転換とハンガリー社会)

1. A rendszerváltás filozófiája
体制転換を哲学する
2. A kincstári kapitalizmus
国庫資本主義
3. A kölcsönvett gazdaság és a vendégmunka jelenség
借り物経済とゲストワーカー現象
4. Populizmus és pragmatizmus
ポピュリズムとプラグマティズム
5. Az állami kitüntetés és a történelmi értékelés
国家叙勲と歴史の評価
6. Nem minden változtatás reform
すべての変革は改革にあらず
7. A reform arroganciának veresége
改革アロガンスの敗北
8. Figyelm és fegyelme hiánya
規律と注意力の欠如

Könyvvilág

(第2部 書物の世界)

9. Marx György, A marslakók érkezése
『異星人伝説』訳者後書き
10. Kornai János, A gondolat erejével
『コルナイ自伝』訳者後書き
11. Kornai közgazdaságtan
コルナイ経済学をどう理解すべきか

Filmvilág

(第3部 映画の世界)

12. A Beautiful Mind
ノイマンとナッシュ
13. Sicko
何を学ぶべきか
14. Taking side
歴史の犯罪とどう向き合うべきか

„Ferde szemmel” --- szellemes alcím, de csak félig állja meg a helyét. Igaz, Tsuneo Moritának japán arca van, de a szíve és az agya csak félig japán. Félig már hozzánk tartozik. Nem csak azért, mert évtizedeket töltött Magyarországon és megtanulta nehéz nyelvünket. Azért is, mert sok szempontból belülről éli át azt, ami ebben a országban és határainkon túl, a poszt-szocialista régióban történik. Egyszerre néz ránk életünk résztvevőjeként, azonosul problémáinkkal – ugyanakkor megőrzi a külső elemző tárgyilagosságát, és a Japán fejlődés alapos ismerete, a nemzetközi összehasonlítás tovább növeli fejtegetéseinek magyarító erejét. Sok állítását, köztük nem is egy kritikai észrevételét meggyőzőnek és tanulságosnak tartom, bár vannak olyan gondolatai is, amelyekkel nem tudok egyetérteni. Nyugodt szívvel ajánlom a könyv elolvasását. Morita minden írása érdekes, tartalmas, gondolatébresztő.

Kornai János, A közgazdaságtan emeritus professzora, Harvard University és Collegium Budapest

「ドナウの四季」創刊にあたって

これまで、「パブリカ通信」や「ドナウ通信」などの在留法人向けメディアがありました。その両者とも昨年で廃刊となり、在留邦人の動向を伝える媒体がなくなりました。そこで、新たにハンガリーに在留される邦人の動向やニュースを幅広く伝える雑誌を創刊することにしました。

世の中、かなりの部分が電子媒体で処理される時代になってきましたが、やはり手にとって読める昔ながらの印刷媒体は、情報伝達の手段としてその役割を失っていないばかりか、ますます貴重なものになっています。すべての在留邦人を対象とする非営利の雑誌の発行は容易ではありません。実際、このような雑誌の発行は近隣諸国では見られません。しかし、ハンガリーでは20年近くにわたって「ドナウ通信」が発行されてきた歴史があります。そうした経験を活かして、息長く、この雑誌を継続して行こうと考えています。

1990年代初めの頃はまだ在留邦人数も百名前後で、ハンガリーの邦人社会は小さな社会でした。商工会も日本人会も補習学校も、渾然一体化した集合体として存在してきました。ところが、ハンガリーの開国とそれに伴う日本企業の大量進出、さまざまな目的を保有した個人の到来によって、ハンガリーの

邦人社会は量的のみならず、質的にも非常に多様になってきました。百名程度の社会であれば、ほとんどすべての邦人が互いに顔見知りになることは難しくありません。実際、ハンガリーの邦人社会も、長い間、そのような状態が続いてきましたが、1990年代の後半から始まった企業の進出、個人事業主や多様な個人・留学生の到来で、牧歌的な邦人社会の時代は過ぎ去ってしまいました。

今、実にさまざまな分野で、またブダペストだけでなく地方の街で、日本人がハンガリー社会の中に溶け込んで生活し、活躍しています。国際的に活動する日本企業は良く知られていますが、地道にハンガリー社会に貢献している邦人の生活や活動は知られていません。そういうところにも目を向け、光を当てて、その経験を共有していくことも大切なことだと考えます。

また、ハンガリーの勤務や生活を終えて帰国した人々、あるいは日本にいながらハンガリーとの接点を持ち続けている人々も多くいらっしゃいます。そういう人々の近況やハンガリーとの関わりを知ることも、当地に生活する者にとって貴重な知識・知恵となると確信します。

こうした雑誌の性格上、当地に長く在留されている人々の力をお借りしなければなりません。とりあえず、出発時点での編集委員として、東口美登里さんには在留邦人紹

介を、飯尾欽哉さんには運動サークル情報を、そして桑名一恵さんには留学生・文化情報を担当してもらうことにしました。実際にはこれらの編集委員を通して、さらに多くの方々に情報を提供していただいたり、ご支援をいただいたりしています。今後、雑誌がカバーするネットワークが広がるにつれて、編集委員の数や担当分野を広げていくことが必要になります。お互いが知恵を出し、自らのネットワークを共有化することで、ハンガリーに在留する邦人のかなりの部分をカバーするネットワークが出来上がることを期待したいと思います。近日中には、本誌のHPも立ち上げる予定でいます。邦人社会の情報が適宜、周知されるような媒体としても、このHPを活用したいと考えています。

本誌創刊にあたっては、本誌発行の趣旨に賛同される方々の支援を受けています。ハンガリーの日本人社会に貢献している人々の力を借りて、今後とも、幅広く、あらゆる人々の力を借りて、本誌の改善に努める所存です。皆様方の厚いご支援をお願いします。

2009年1月15日
編集長 盛田 常夫

皆様の情報ならびに原稿をお待ちしています。以下の担当宛てにファイルで送信してください。投稿にあたっては、横書きをお願いします。図表、写真等は別ファイルとして、原稿に組み入れずにお送りください。紙面調整のために、原稿の短縮、字句の修正を行うことがありますので、ご了解ください。

一般情報は盛田宛 (morita@gmail.com)、邦人紹介情報は東口宛 (japancoop@jpc.hu)、スポーツ関連情報は飯尾宛 ((daikichi@mail.datanet.hu)、留学生・文化情報は桑名宛 (propart@chello.hu) をお願いします。

また、ネットワークの基点となっただけの編集委員を募っていますので、趣旨に賛同いただける方のご連絡をお待ちしています。

なお、送料や印刷部数を最小限にして、雑誌維持の経費の節約に努めますので、地域や職場でまとめて配布していただける方を探しています。雑誌のPDF版は近々開設される本誌のHPからダウンロードできるようにいたします。

マートン・ラスロー(彫刻家、08年10月5日没)を偲んで

堤 一実

目の前にある写真の中のラツィ(ラスローの愛称)は、しゃれた赤い縞柄のパジャマ姿。気取って胸元に手を入れ、口元をほころばせている。寄り添いベッドに腰掛けているのは妻のマリアンナ。セント・ヤーノシュ病院の一室である。ちなみに、この病院の入り口右手にあるセント・ヤーノシュ像もマートンの作品である。



私たちが彼に会ったのは、これが最後となった。彼が亡くなる2カ月ほど前の8月11

日のことである。2年ぶりにブタペストを訪問した私たちであった。病室の壁面は高さ半分くらいまで水色のタイル張り、まるで大きなお風呂場のように寒い季節だったらつらかろうと思われる。食事の盆が置いてあったが、丸パン一つ、ミニトマト一つ、薄いソーセージ2枚と牛乳のミニパックだけで、マリアンナは毎日2回自宅から食事を運ぶとのことであった。痛み止めを飲んでいるから大丈夫と、しばしゆっくりとした時間であった。ラツィは半年ほどの闘病でやせてはいたが顔色もよく、全身が癌に冒されていて、もう手の施しようがないと聞いていたのが嘘のようであった。

帰国してから様子を聞くと、希望どおりラツィは治療を受けながら家でやりかけの彫刻の仕上げをしているのだ、という。もう体力もなく、地下のアトリエには行けないので台所のテーブルが仕事場になってはいるけれど、ほとんど痛み止めのモルフィネに頼っているから、とマリアンナは電話口で泣いていた。彼亡き後を考えて押しつぶされそうに怖いと。

それから2月もたたぬうちに訃報が入った。2人の娘(キング20歳とユリカ18歳)とみんなで手をつないで別れを告げたのだと、穏やかに逝ったと。在ハンガリー日本大使館の覚田広美氏からもご親切にお知らせを頂き、シングルゲットでの葬儀に花輪

を送る手配をしていただけたのは有難かった。ペシュトのバジリカでの葬儀には彼の死を悼んで沢山の参列者があったと後で聞いた。

私たちがハンガリーに赴任したのは今から16年あまり前の1992年の夏のことであった。美しいブタペストの風景にすっかり魅せられていた私たちであった。王宮の丘のナショナル・ギャラリーに夫と訪れたとき、彫刻の部屋の片隅で高さ50センチほどの1つの小品に惹きつけられた。公園で遊んでいるのか、柵に座っている。お手製の王冠のようなものを被り、夢見るような瞳の7、8歳くらいかと思われる可愛らしい女の子の像である。夫はこんなのが買えたらいいねと一言。その頃、改装したばかりの公邸には、絵も置物も不足していた。丁度何か良い物はないかと探していたのである。その時は作者の名も知らずにいたが、偶然にもその作者から作品の写真集が送られてきて、その像がマートン作の「リトル・プリンセス」(1972年作)とわかった。それが縁で作者を訪れ、めでたくリトル・プリンセスは公邸の玄関に置かれることになった。恐れていたお値段も比較的リーズナブルで、何とか夫の懐で賄えたらしい。冷戦が終わってまだ2、3年の頃で、ブロンズなどを買う人があまりいなかったからかもしれない。彫刻家マートン・ラスロー一家とはその後今までの付き合いとなったのである。彼の気取らないそして暖かな人柄と対象への誠実さ、そして深い精神性が感じられる作品が好きである。リスト音楽堂前のリスト像、国会協の詩人像「ドナウの畔にて」など作品の数は多い。文化勲章に相当する勲章ももらっており、ハンガリーを代表する彫刻家だったと言ってよいだろう。

2000年、日本での初代ハンガリー国王戴冠1000年記念ハンガリー・フェスティバルの一端を担って、彼の彫刻展が東京ほか2箇所で開催され、ハンガリー彫刻の水準の高さを示す好い機会となると共に、マートン一家の来日も実現した。できるだけ一家の滞在を楽しくしようと家にも食事に招んだのだが、彼らの家に比べて我が家があまりに小さいので吃驚したらしい。夫妻は彫刻展から離れられないのでキングとユリ

カの二人女の子(その頃12歳と10歳くらい)の世話は私共の次女夫婦に任せ、ドイツニーランド、浅草三社祭りなど案内した。海を見たいとの希望で一家揃って江ノ島行きとなったが、ハンガリー語をなさる岩崎先生が付き添ってくださったので本当に有難かった。波打ち際で何枚ものスケッチをしていたラツィの姿を思い出す。車窓から景色を楽しみつつも、「なぜ電線が幾重にもぶらぶら引かれているの?」、「なぜ洗濯物やマットレスを他人に見えるところに干すの?」と不思議だったらしい。京都見物は、その頃京都の大学で教えていた夫が引受けてくれ、竜安寺ではユリカが素直に瞑想を試みていた由。キングには大変日本の印象がよかったらしく、学校で写真、みやげ物をみせながら大いにレクチャーをしたと後で聞いた。マートン一家にとって訪日は一大イベントであったと思う。展覧会の実現は日ハ友好協会の英断であった。

任国での家族ぐるみの付き合いが深く、長く続いていくのは、なかなか難しいではないかと思うのだが、私どもにとってマートン一家のこの15年以上にわたる友情は、最後の任地ハンガリーへの私たちの特別な思い入れと重なって貴重なものである。

ラツィ亡き後マリアンナは彼の遺作の整理、管理に忙殺されているけれど、ここには「穴が開いたまんま」と先日の電話で話していた。キングの娘ヨハンナ(0歳)も大きくなってきたし、キングは育児と大学の卒論で忙しい。ユリカは行く道をあれこれ考慮中とのこと。2009年5月にモスクワでラツィの遺作展が開催されるので準備も大変と言う。ラツィが逝き、私共しみじみと時の流れを思う日々である。

池袋の東京芸術劇場大ホールのフォワイエに大きな方のリトル・プリンセス像が置かれているが(高さ170センチ、1990年作)、これはマートン彫刻展の東京会場となったのが芸術劇場のギャラリーで、その記念として氏より東京都に贈られたものである。ブダペストのドナウ河畔の柵にもこれと同じサイズのこの像が坐っている。

僕がゴルフを始めた理由(わけ)

小林 研一郎

指揮者は体力勝負でもある。その意味でスポーツ的要素がかなりの部分を占める。だから、健康で体が良く動いてくれないと、指揮の仕事を存分に成し遂げることはできない。1回のコンサート指揮で実に2万回も手が動く。足腰が丈夫でないと、上半身を自在に動かすことはできない。だから、体の要である腰を鍛えて、しっかりした体の土台を造ることが、指揮者にとっても基本なのである。

ところで、僕はなまっていた体を、復活させるという以上に、鍛えることに成功した。それも偶然の出来事から。それがゴルフとの出会いである。

それまで、僕にとってゴルフは運動性に乏しい、どちらかというスポーツに属さないゲームにすぎなかった。野球などの激しい運動性のあるゲームに魅せられていた僕にとって、ゴルフは魅力を感じさせるものではなかった。

そういう僕を熱心にゴルフへ誘ってくださる方がいた。当時のJALのアムステルダム支店長である。とはいえ、その誘いにたんに乗ったというのではない。僕の意志を変えさせたのは、氏のたばこ好きと、僕の極度なたばこ嫌いである。

「僕がゴルフを始めて、1年後に勝負して、僕が勝ったら禁煙してくれますか?」。「当然ですよ!」。この約束が僕とゴルフとの出会い。45歳の1月1日に僕はゴルフを始めた。当時、僕は「パー」の意味すら知らなかった。当然、氏の「ハンディ11」がどれほどたいへんな世界であるかも。

それから僕の挑戦が始まった。思いこんだらまっしぐらタイプの僕は、ひたすらボールを打ちまくった。多い日は1日に800球。ひと口に800球というが、これはたいへんな数である。いっきには打ち切れないから、朝、昼、版と3回に分けて打つことが多かった。

たかがゴルフとはいえ、これだけの量を打つと相当な運動量になる。1週間もすると体がしまってくる。体重も2キロほど減り、少し出っ張り始めていた腹は完全に引っ込んだ。しかし、何事も、「過ぎ足るは...」である。

2月19日に日本フィルの福岡公演がある午前中のこと。練習場でボールをたたいてマットがポーンと飛び出した瞬間、肩に激

痛が走った。その夜は寝返りを打つ度に、痛みで目が覚めた。そんな状態なのに、帰京してすぐに福島竹馬の友とのゴルフにでかけた。今でこそ雨が降ると今日は止めようと弱気になるほどに気持ちは落ちているが、当時は雪が舞おうが雷が落ちようが、という高揚した気分であった。

ふるさとのゴルフ。昔の腕白時代の友達とのゴルフは青春の香りそのもの。野山を所せましとかけずりまわったあとの爽快感はあの時代だけのものと思っていたが、どうしてどうして、真夏の汗のしたたり落ちる中でもそれを発見できるのは嬉しい。フェアウェイに立つと、ゆるやかに青春の時間が戻ってくる。顔にこそ、深い溝が刻まれてきたが、精神は昔のままだ。

常磐高速道路をいわきに向けてひた走る。突然くしゃみが出た。運転中のくしゃみはやっかいなもので、目をつむってしまう。一瞬視界が消える。加えて体にももの凄い痛みが走った。金縛りにあったように体が動かない。もう1~2秒続いたら命がなかった。車は蛇行し、反転した。しかし神は僕を見捨てなかった。他の車がうまくさけてくれ、惨事を免れた。

痛みで運転は不可能。僕は竹馬の友に出向いてもらい、彼の運転で医者へ駆けつけた。レントゲンの結果は、「骨折」。疲労性骨折というのだそうだ。筋肉の力で骨が折れることによって、骨も筋肉も静養状態になる。肉体の神秘だ。

せっかく一つ目標を持って始めたゴルフなのに、退却を余儀なくされた。僕は光明にすぎるように医者へ尋ねた。「先生、パターはしてもよいでしょうか」と。まず聞くべきは、「指揮はできるでしょうか」のはずが。

2~3ヶ月の静養が必要となったので、とりあえずアムステルダム対決を3ヶ月延期していただいた。コンサートとはいえば、その間、痛み止めの注射をし、さらにミイラのようにさらしを巻いて指揮をするはめになった。

しかし、回復は意外なほど早かった。医者には禁じられていたけれど、少しずつ走り込んだり軽いアプローチなどを始めた。ブダベストの9ホールあるゴルフ場は、当時はお客が少なく、10個ほどのボールをうちなが

らラウンド練習ができた。

1年ほどの間に、僕は結構、腕を上げていた。たとえば、奇遇というか、前年に骨折した2月19日(国際指揮者コンクール優勝の発端もこの日だった)にオランダのケネマーで、78のスコアを出すことができた。アウトの2ホール目にはホールインワンも記録した。

そして、対決の日が来た。この日、僕はなかなか調子が良く、バットは好調だった。ところが、JAL支店長は、ショットは素晴らしいのだが、パットがさっぱりで、ほとんど3パット、4パットなのだ。負ければ「禁煙」という重圧が、イップスを強いているようだった。

13ホール目に入った時、リードしていた僕は、氏に「こういうスポーツに巡り会ったことにたいへん感謝しています。今後の人生の大きな布石ができたといっているほどです。あらゆる意味で“指揮”に好影響を及ぼすゴルフを始めさせてくれたのは支店長です。もし僕が勝っても内容ではまったく話になりません。禁煙の件はナシということで...」。

そのとたんに、氏のパターは別人のようになり、結局この対決は負けてしまった。

もうあれから何年も経つが、ゴルフはちっともうまくならず、相変わらず、同じミスを繰り返している。自分がうまく指揮できれば、オーケストラが最高の響きで応えてくれる。このような素晴らしい世界に住みながら、時には才能のなさを呪う日々。音楽に壁が...そしてゴルフにも...。僕の前には立ちふさがる壁が。



おしどり

糸見 偲

「そうですか松江からですか。あのラフカディオ・ハーンのだ」。

日本人学校校長として赴任されていた三代さんが松江の方と聞いて懐かしさを感じた。私は松江には行ったことがない。何県にあるのかも知らなかった。でも、子供の頃ラフカディオ・ハーン(日本名、小泉八雲)の怪談集を読んでから尋ねてみたい土地のひとつであった。機会がなくいまだに実現していないが、「怪談」の中の色々な話は、今でも心の中にそっとある。「雪女」、「耳無し芳一」、「屏風絵のおんな」「乳母桜」など。なかでも一番好きな話が「おしどり」。

昔、あるところに、一人の猟師がおりました。ある日のこと猟師は狩りに出かけたものの何も獲物を見つけないことが出来ません。思案にくれていたら、おしどりのつがいと並んで泳いでいました。猟師はお腹を空かせていたので二羽のおしどり目掛けて矢を放ちました。矢は雄鳥に命中し、雌鳥は向こう岸の草の中に逃げ込み姿を消しました。

その夜、猟師は夢を見ました。美しい女が部屋に入ってきて枕元に立ちさめざめと泣き始めました。「あの人がどんな悪い事をしたのですか。私達二人はとても幸せに暮らしていたのに、貴方はあの人を殺してしまいました。貴方はご自分が何をなさったかお分かりでしょうか。貴方は私までも殺してしまわれたのです。夫を亡くして私はとても生きてはいけません。貴方はご自分がなさった事を少しもご存知ないのです。でも明日、赤沼へいらっしゃれば、きっとお分かりになるでしょう」。そう言って、泣きながら女は立ち去りました。

目が覚めた猟師は夢のことが心に残り、気がかりになりました。あれはただの夢なのかどうか確かめようと、赤沼へ行きました。川岸に着くとそこには雌のおしどりが一羽泳いでいました。おしどりも猟師に気づきました。けれど、おしどりは逃げようとせず、猟師の方に向かってまっしぐらに泳いでいきます。そして、突如、くちばしで自分の体を突き裂いたかと思うと猟師の目の前で命絶え果てたのです。

それから、猟師は頭を丸めて僧になりました。

おしどりの話は祖母からも聞いた。この話だけは不思議に何回聞いても飽きなかった。祖母は色々な昔話を良く知っていて話し方も上手だった。

「むかあし、むかし、あるところに えらあのお坊様がおられたんだと」。ひとつの話が終わると「もっと、もっと」と私がせがむ。「お前には往生するわ」と言いながら面白い節回しで話を始める。目を閉じると祖母の声が聞こえてくる。

私には「おしどり」の話とよく似た体験が幾つかあった。ある日、家に一羽のカナリヤが迷い込んできた。どこからか逃げてきたようだが、放すと犬か猫に食べられてしまうと思い、そのまま私の所で飼う事にした。カナちゃんの名付けて息子と一緒に世話をした。ところが、カナリヤなのにカナちゃんは全く鳴かない。雌だから雄と一緒にしてやると鳴くようになると云われ、さっそく小鳥の店へ行ってコロコロ歌っている若い雄を選んできた。名前は息子がガッチャンとつけた。

直ぐに気が合って同じ止まり木に寄り添ってピチピチ喋るようになった。止まり木の端に巣箱をつけてやると、「待ってました」とばかりにせっせと羽を集め始めた。ある朝気がついたら巣の中に小さな卵が3個あった。それから二羽の雛がかえった。雛たちが飛べるようになったので、大きい鳥かごに買い替えた。鳥の家族は夜になると四羽とも一直線に止まり木に並ぶ。二羽の雛を真ん中にはさんで両脇にガッチャンとカナちゃんが寄り添う姿は本当に愛らしかった。でもこの幸せは長く続かなかった。

初夏のある日、居間のガラス戸を全開にして私は日光浴をしていた。ガッチャンが楽しそうに歌って、雛達は止まり木を飛び回っていた。あまりの気分の良さに少したた寝をしてしまったらしい。ガタン、バタバタバタ、カナちゃんのキーツと言う音で目が覚めた。

鳥かごがひっくり返っている。慌てて鳥かごに覆いかぶさって鳥たちが空中に飛び出さないように囲った。その時サツと黒い猫が逃げていったのが見えた。やっとの思いで鳥かごを元の位置に戻して中を見ると一番ちっちゃい雛がいない。

「ああ、あの黒猫が持っていったんだ。どうしよう」。

「お母さんの馬鹿バカ!」。息子の涙顔が辛い。

「また卵を産むよ!」と、いつも平静な夫の言葉。

「そうならいいけれど」。でもそうはならなかった。

その晩からカナリヤたちは静かに眠る事が出来なくなっていた。アッチコッチと飛び回ったり柵にしがみ付いたり、落ち着かない。お兄ちゃんは丸まったまま、あまり動かなくなった。そしてガッチャンは、全然鳴かなくなった。

三日目の朝、お兄ちゃんが止まり木から落ちて死んでいた。カナちゃんはバタバタ飛び回って落ち着かない。いなくなった二羽の子供たちを捜しているのだろうか。そして、だんだんカナちゃんの様子がおかしくなった。羽に艶がなくなり、抜けてきた。餌もあまり食べない。そ

して1週間、やはりカナちゃんは止まり木の下で死んでいた。

一人ぼっちになってしまったガッチャンはその後、1年ばかり生きた。淋しかろうと2度ばかり見合いをさせたが、気に入ったパートナーは見つからなかった。そして、最後まで一声も鳴かなかった。鳥でも死ぬほど悲しい気持ちを持っているのだろうか。幸せだった家族がちよとしたきっかけで崩壊してしまう。鳥の世界でも人間の世界でも違いは無いのかと思った。

息子が友達からハムスターのつがいを貰ってきた。このカップルの悪戯には参った。タンスの隙間に入ったら引っ張り出すのに大騒ぎ。クッションの中に入って羽毛を散らかすし、アッチにいたと思ったらコッチにと神出鬼没で困り果てた。息子の大事なペットなので捨てに行くわけにもいかず、それで息子のために建てた掘っ立て小屋に連れて行った。

木箱を見つけて、その三分の一のところに柵をこしらえ干し草を入れて彼等の寝場所を作り、後の三分の二は遊び場に。天井にはガラス板を3枚、隙間を空けて置いた。これで光も空気も入る。彼等は柵を出たり入ったりして気に入っている様子だった。私は2日ごとに乾いたパンとサラダを持って通い、週末は息子が一緒だった。乾いた硬いパンが好物で、両手に持ってカリカリ、カリカリ食べるのが可愛いかった。

その日も、いつもの様に固いパンを持って出かけた。小屋へたどり着いたらどうも様子が変わった。何も盗られるものは置いてないので心配は無いけれど、入ってみて驚いた。ハムスターの箱が荒らされている。ガラス板が下に落ちていて箱の中が裸になっている。急いでハムスターを探すと大きい雄の方がいない。雌の方は柵の内側で丸く縮まっている。どうも狐にやられたらしい。小さくなっている雌を手の平にとって背中を撫でてやっても、いつもの様に喜ばない。好物のパンを与えても食べようとしない。

このまま小屋に置いておくと狐に食べられてしまうと思い、アパートに持って帰った。日が経てば元気になってくれると思ったが、反対にどんどん弱くなっていき、気がついた時は柵の間に頭を突っ込んで死んでいた。自ら首を柵に押し付けて自殺したように見えた。「夫をなくしては生きていけません」。そんな風に云っているように見えた。

私は昨年、最愛の母を亡くした。それ故、余計に生きとし生ける物の哀しさが心に沁みてるのかも知れない。

最近読んだ本のことなど

堤 功一

家でじっとして3食喰べていると、日に100グラム、200グラムと増えていよいよメタボ度を高めてしまう。ゴルフもテニスもやらないので、散歩でもせねば、と思う。ところがただ歩くのではつまらない、何か目的地が欲しいというタイプである。住んでいる大田区には17の区立図書館があって、その中の三ヶ所がわが家から程遠からぬ距離だ。夫々片道大体2500歩程なので、その一つを目標にして往復すれば軽い散歩になる。図書館に行くこと自体は億劫ではない。ということで、運動も目的の図書館通いが相当の頻度で行われた。行けば借りる。借りれば読む。返しに行く。また借りる、との悪循環が三つの図書館を中心に続き、加えて外務省の図書館、都立の日比谷図書館にも出入する。テレビも時に面白いし、講演会にも行く。それで本業的な方面の本を読む時間が却って足りなくなる、という結果となってしまった。だから最近は図書館通いを減らし、この悪循環の回転速度を落としている。すると体重が増加気味となる。あとは食事の量を減らすしかない。家内はデザートを減らせと言うが、それもまた難しい。

最近区立図書館から借りた本の中で、特に面白かったのが池橋宏の『稲作渡来民』と岡田英弘の『歴史とはなにか』だった。日本の昔に興味があるのだ。

『稲作渡来民』

日本の国土は特に稲作に適しており、それで大いに得をした。採集、狩猟の縄文の文化に対して、水田稲作の技術を持った渡来民が入って来て、弥生時代となった。弥生の始まりは、西暦紀元前800年から前1000年くらいのことらしい。水田稲作は生産性が高い。人口が増え始め、やがては奴国や倭国のように「くに」と呼ばれるほどの集落も出来てきた。土器も祭器的、装飾的な縄文式から実用的、機能的な弥生式となる。池橋宏によれば、水田稲作は中国の長江下流域で、春秋時代には呉や越と呼ばれた地方の人々によって始まったとのことである。中国では南船北馬と言われる。中国北方の人々は、もっぱら馬で移動し、南の人は船を移動手段とするというものである。南の呉や越の人は、比較的小さな丸木舟を操って湿地帯に水田も作り、魚も取り、移動もする。彼らは、稲作の適地を求めて中国の沿岸地域を北上、山東半島に至り、さらに海上を東に進んで朝鮮に水稻をもたらした。それが朝鮮の南西部や南部を経て日本列島に及んだのだという。

温暖多湿で浅い沼地の多い日本は、長江下流域に並ぶほどの水稻耕作の適地だった。水田を作る入り江や川筋の湿地は、縄文人は利用していなかったから棲み分けが出来た。また渡来民は大挙して押し寄せたのではな

く、小人数宛小舟で徐々に入って来たので、特に争いも起こらずに縄文人との共生を始めることが出来たのだろう、と言う。日本語も縄文語がベースになったものらしい。

勿論水稻の耕作は、長江の上流域や中国南部など他のアジアの諸地域にも伝わるが、長江の河口から東シナ海を渡って直接日本に来る経路は先ずなかったらしい。その時代長江下流域の人々は、そのような航海に耐えるほどの大きな船は使っていなかったとのことだ。

『日本書紀』

日本という国号ができたのも、その国号の下に国が一つに纏まったのも、大体7世紀の天智天皇の頃だという。白村江で百済と倭国の軍が唐と新羅の連合軍に負けたとき、唐に攻め込まれるのを恐れ、国の体制を固める必要を感じたためである。「日本書紀」を作成させたのは、弟の天武天皇であった。『歴史とはなにか』に依れば、日本書紀は中国の「史記」に倣って、自分の王朝の起源、成立の由来、正統性を対外的、対内的に示すために組み立てられたもので、史実を記そうとしたものではない。内容は、天智、天武の兄弟とその両親という四代の天皇の事績を下敷きにしており、7世紀末から8世紀初めの建国当初の事情の記述を中心としている。例えば、神武天皇の東征は、壬申の乱の際の天武天皇自身の即位に至る経緯とほぼパラレルに描かれている。神武から応神までの天皇は実在していなかったらしい。日本書紀が史実から離れていることは、当時の人々は良く承知していたことだろう。対外的には、日本の王朝は歴史が長く、中国とほぼ同等で、中国の王朝に朝貢するような存在ではないと主張しているのだそうだ。言われてみれば、そういうことかなと思う。

「古事記」は日本書紀の大枠の中で、やや後代に作られたものだという。そうだとすると、いろいろ面白い伝承が含まれている。史実ではなくとも、当然古代の雰囲気は伝えているだろう。長部日出雄の「古事記の真実」も読んだ。稲作民天孫族の高天原は高千穂峰あたりという説にも説得力を感じる。

多極化の世界

以上は趣味の方面の読書についてだったが、私の本業的な分野といえば、今でも国際関係、国際法ということになるだろう。東西冷戦が終わってから大体20年である。イデオロギーの対立がなくなり、平和がより確かなものになったと感じて、あの時はほっとした。冷戦後の世界について、「文明の衝突だ」とか、「歴史の終わりだ」とか、「グローバル化だ」とか、いろいろ言われて来た。確かにグローバル化は大きな特徴で、国境を越えてNGOやテ

ロリストが活動の範囲をグローバルに広げている。経済危機もグローバルに広がる。しかし結局のところ、今の世界の基調は、大国の並ぶ「多極化」にあるようだ。現在、そして近い将来の大国としては、米国、EU、ロシア、中国、インドの5ヶ国が挙げられるだろう。領土、人口、軍事力、経済力などの点で、この5国は十分パワーがあり、大国としての地位を占めている。

この本業的な分野で最近読んだ本が、ビル・エモットの『ライヴァルズ』、ロバート・ケイガンの『歴史の再来』、池上彰の『大衝突』の3冊である。この3冊は共通して「大国間の対立、競争が今の世界、国際社会の特徴だ」と言っている。エモットの本は、「アジア三国志」という邦題のしており、アジアの三大国、中国、インド、日本の間の競争が主要テーマとなっているし、ケイガンは、「大国のナショナリズムが戻って来た、民主国家群と専制国家群との対立が目立つ」と言う。

池上彰の本は、その副題が示すように、主として巨大国家群と大国間の対決を平易に解説するものである。この三冊の中では、ケイガンの「歴史の再来」が一番私の考えに近いことを言っている。

日本の外交について

本を読めば、感想も浮かぶ。この「多極世界」の中で、日本の外交はどのようなラインを取るべきだろうか。1957年に外交青書の第1号が出た。この時日本の外交三原則として、「国連中心、自由主義諸国との協調、アジアの一員の立場堅持」の三点が挙げられていた。今の時点でこの三原則を見ると、先ず国連中心ということはあるにない。国連は安全保障にほとんど役に立たないからである。アジアの一員ということについては、日本は地理的にアジアに位置しているため、アジア諸国との友好な関係の維持が重要であるのは当然だ。中でも中国との友好は重要だが、これは決して容易ではないだろう。中国国民はナショナリズムが強いからである。大国間の競争、対立、特に民主国家と専制国家の間の競争、対立が特徴である今の世界で、民主国家日本にとって最も重要なのは、やはり米国、EU、との友好、協調である。日米同盟が外交の基軸である。また日本人は「人間の安全保障」が好きだが、この概念を法律的に見れば、「人権の保護尊重」ということになる。民主主義も人権の保護も、帰るところ個人尊重という同一の考え方から来る。民主国家日本の外交においては、人権の尊重を具体的ガイドラインにすべきだろう、というのが私の考えである。

このように、この年齢で晴読雨讀本を読んでいると、段々目が霞んでくる。春には白内障の手術、ということになるだろうか。

日本語を教える喜び

佐藤 紀子

新年早々職場に行くと、同僚と私宛に日本から小包が届いていた。差出人は、関西のある大学院に留学している卒業生である。小包を開けると、研究室にぱっと明るい光がこぼれた。私達の大好き物である羊羹やお煎餅、お煎茶などがぎっしりと詰まっていたのだ。まるで日本の実家から送られてきた差し入れのよう。同封の手紙を開く。いかにも今時の女の子からの便りである。青色便箋いっぱいには小さなかわいい象さんの絵が踊っている。読み進むうちに、思わずホロリとさせられてしまった。もう2

年も前の卒業生であるが、私達への感謝の言葉とともに、内定取り消しなど昨今の厳しい就職戦線の中で、経済学という専門を活かして日本で就職したい気持ちも強いが、大学時代の楽しい日本語授業と温かな日本語研究室を思い出して、ハンガリーに帰って教師になりたくもあると悩める心が書かれてあった。私達は羊羹とお茶に舌鼓を打ちながら、教師冥利とはこういうことかと幸せな気分浸った仕事始めであった。

彼女は東アジア異文化間経営学コースの卒業生である。私達がブダペスト商科大学国際経営学科に東アジア異文化間経営学コースを立ち上げたのは、2002-2003年度のことであった。ハンガリーに進出する東アジア系の企業が増え、東アジアの文化や歴史、政治や経済、日本的東洋的経営、異文化コミュニケーションなどの背景知識を持った人材の育成が急務となったことが動機設された異文化間経営学専攻コースの学生に対しては、日本・中国・韓国朝鮮の歴史及び経済、文化関係史、エチケット及び儀礼習慣、異文化間経営学などの講義を必修科目とした。講義だけではなく、2003年春には学生達に異文化間コミュニケーションの重要性を教えるために、ビジネスフォーラムを開き、日系企業2社の社長、日系企業で働くハンガリー人を講師及びパネラーに迎え、講演とパネルディスカッションを行った。会場は200人の学生で埋まり、関

心の高さが伺えた。この他、毎年日系企業あるいは他のアジア系企業にお願いして、学生に会社見学をさせていただいている。実際に自分の目で日系企業内を見ることは、学生の動機付けに大いに役立っている。

しかし、異文化間コミュニケーション教育には、理論学習とともに、実践学習が欠かせない。実社会で起こりうる状況のシミュレーションをさせ、他者と協力しつつ、大学で学習した理論を踏まえ、自分で問題を

2007年立命館草津キャンパスでのセミナーの様



解決するプロセスを学ぶことが重要である。そこで、日本の大学生とハンガリー人の大学生の混成チームを作り、選んだテーマについて協働研

究作業とその成果の発表をさせるという試みを2005-2006年度から開始した。この中

で、2006年は立命館大学経済学部の学生12名が2週間ハンガリーに、2007年はブダペスト商科大学の学生10名が2週間日本に滞在し、相互の大学で世界遺産と環境問題に関する学習と研究を行った。また、2007年度からは城西大学の学生達もブダペスト商科大学に短期留学し、同様な協働学習をしている。マルチナショナルなチームの中で課題達成のために協働で作業をすることは、言葉や表現の問題もさることながら、作業の進め方、議論の仕方など、お互いの文化の違いを克服しなければ成果に結びつかない。学生時代にこのような協働学習を体験することは貴重である。特に日本へ留学できない学生にとっては、このような機会はまたとない貴重な経験となる。

解決するプロセスを学ぶことが重要である。そこで、日本の大学生とハンガリー人の大学生の混成チームを作り、選んだテーマについて協働研



立命館大学経済学部学生との異文化コミュニケーション実習

ブダペスト商科大学の学生には、卒業前に3ヶ月間、インターンシップと呼ばれる職場体験が義務付けられている。対象言語の文化を一番よく理解できるのが、この職場体験である。大学の講義で学習した理論を実際に検証できる貴重な場であり、卒業後の人生にとって大きな転機となることもある。これまではハンガリー国内の多国籍企業や日系企業・機関、あるいはヨーロッパの企業でインターンシップをすることが多かった。しかし、数年前から日本でインターンシップを行う学生も出てきた。昨年の秋に東京の港区役所で3ヶ月間のインターンシップを経験した学生は、帰国後、興奮冷めやらぬ状態で報告に来てくれた。

ブダペスト商科大学で日本語教育が始まって、今年でちょうど25年を迎える。ハンガリーの日本語教育を取り巻く環境は、当時に比べて大きく変化した。学習者人口も飛躍的に増え、国際交流基金の調査では教育機関で学ぶ学習者は1400名を超えた。通信教育の教材はすでに2500部を売り上げたそうである。商科大学でも、学習者数はここ10年、50名前後で推移しており、日系企業への就職者や日本への留学生も多い。

日本では、多文化共生を目指す日本語教育が叫ばれているが、EUに加盟したハンガリーでは、『外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ共通参照枠』の日本語教育への導入が課題となっている。時代によって課題は異なるが、結局のところ、日本語教育は、「人育て」である。世界のどこにいても、どんな文化的背景を持つ人間に対してでも、先入観や偏見を捨て、互いに背を向けることなく対話を続けていくための技能と忍耐、意欲を養うことだと思う。

ハンガリー国内はもとより世界中で活躍する卒業生に地下鉄や飛行機の中、空港でバツリ出会い、話がはずむことも珍しくない。よく考えてみると、私達のほうが学生や卒業生に元気をもらっているようである。

金子三勇士君セゲドでデビュー

3月のバルトーク国際ピアノコンクールで見事優勝した金子三勇士君は、副賞として約束されたオケとの共演のために、ハンガリーを訪問しました。11月17-18日の両日、セゲドでハンガリーの巨匠コヴァチ・ヤーノシュ指揮のもと、セゲド交響管弦楽団とモーツァルトのピアノ協奏曲20番を演奏し、満席の聴衆から万雷の拍手を受けました。

セゲドに出発する前日、ブダペストのコーシャー糸見宅で小林研一郎氏との会食があり、その後にオケとの共演のノウハウを伝授されました。曲への入り方、オケが入りやすい受け渡し方、曲の構想力などについて、的確なアドバイスを与えられました。プロのオケとの最初の共演の準備として、非常にタイムリーで有益なレッスンでした。ついでに、アンコールで弾く予定の「愛の夢」(リスト)も披露され、マエストロから「愛の詩を歌うように弾いてごらん」と、曲に心を込める手法が伝授されました。

翌朝にセゲドへ出発した三勇士君は、マエストロ・コヴァチとオケに温かく迎えられました。マエストロからは自分で好きなように弾いて良いというアドバイスを心得、小林先生から伝授された手法を満遍なく取り入れた演奏で、最初のリハーサルでもうオケと

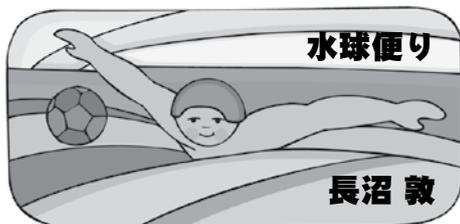
指揮者と一体感を共有することができたと話していました。

両日とも、セゲド国民劇場は立ち見が出るほどの超満員で、若いピアニストの熱演に耳を傾けました。もちろん、聴衆だけでなく、オケも指揮者も十分に三勇士君の才能を評価し、再びハンガリーで共演することを誓って、ブダペストに戻ってきました。

日本へのとんぼ返りでしたが、ちょうど空港でアムステルダムへ出発する小林研一郎夫妻と出会い、セゲドの演奏会の報告ができました。春には東京音楽大学オーケストラの欧州遠征にソリストとして同行するそうです。時間を見つけて、ハンガリーにも来たいと語っています。今後のいつその精進と活躍を期待しましょう。



マエストロと金子三勇士君



9月より水球プロリーグが開幕しました。これまでの戦績は8試合を終え、1勝6敗1分で12チーム中11位と振るいません。リーグは残り14試合を戦い、その後、上位、下位同士でプレーオフを行い最終的な順位が決まります。まさに背水の陣、ここから一つでも順位を上げられるよう戦っていきます。

チームの不振は、経営面の問題にも原因があります。現在、選手には給料が3ヶ月分未払いです。いつ支払われるかもわからないこのような状態では、チームの志気が上がり

ないことは言うまでもありません。

これまでチームは市から決して小さくない額の資金援助を受けて来ていました。しかし、それが突然打ち切られることになり、スタッフ、監督、選手が必死にスポンサー探しに奔走しています。しかし世界的な大不況の中、容易には見つかりません。そんな中、数名の選手が移籍することになりました。給料が支払われないこの現状では、チームとしても引き止めることが出来ず、まさに悪循環に入ってしまったままです。

セーケシュフェヘルヴァールには水球の他に、サッカー、バスケット、アイスホッケー、女子ハンドのプロチームがあります。昨季10位だった私達は市から他のスポーツに比べ軽く見られてしまったのかもしれませんが。しかし

我々は一昨季2部リーグを制し、初の1部リーグで10位と着実に進歩しているわけです。まして、今夏オリンピックで世界一になったスポーツを支援して頂けないことは残念でなりません。

しかし、この状況でもチームは諦めていません。監督は「1%でも可能性がある限り、諦めずベストを尽くさなければならない。諦めた時点で可能性は0になってしまう。」と選手に向かって良く話します。競技だけでなく、生きる上でも同じことなのだと痛感しています。より一層厳しい冬になりますが、私も最後まで諦めず戦い抜きたいと思います。

水球に関するお問い合わせ：
atsushi922@hotmail.co.jp

人生の節目と友人・知人たち

盛田 常夫

初めてフェリヘジ空港へ降りたのがちょうど30年前の1978年12月19日。まだ31歳だった。ハンガリーのことなど何ひとつ知らずに、大学の喧嘩から逃れようと、文部省の交換給費生の資格をとって留学した先が、たまたまハンガリーだった。本当のところ、どこでも良かった。赴任した法政大学の無法状態とも言える騒乱から身を引き、静かな場所で読書三昧したいというのが本音だった。ほとんど人気のない、寂れた田舎の空港に足を入れ、どこか間違った世界に降り立ったのではないかという錯覚に襲われたのを覚えている。

今から振り返ると、この地域に縁があったようだ。これに遡ること10年。1968年、大学3年時の夏、21歳になる直前に300名を超す日本の大きな代表団の英語の通訳として、ソ連とブルガリア、ルーマニアに旅行した。ソフィアではソプラノ歌手、成田絵智子さんのピアノとの音合わせの場に入り通訳した。1カ月ほどの旅行を終え、新潟沖に戻ったところで、ソ連軍(ワルシャワ条約軍)のプラハ侵攻のニュースがラジオから流れた。その当時はまさか将来、この地域に関して仕事をするようになるとは想像もしなかった。この年の初めからヨーロッパでは学生運動が盛り上がっていたが、日本でも秋から大きな喧嘩・騒擾状態に入った。1968年はプラハ侵入やヴェトナム戦争激化で反戦運動が高まっただけでなく、世界各地で大学生が大学や街頭で大騒動を起こし始めた年として知られる。1969年1月初めの東大紛争の終結からこの年一杯まで、日本の多くの大学で休校状態が続いた。このあおりで東大入試が中止となった。

当時、私は郷里の富山県高岡市が設立した学生寮に住んでいた。国際基督教大学のゴルフ場に隣接する土地に、富山の田舎町が学生寮を所有していた。私が大学に通うためにあるような寮だった。毎朝、寮の運動場の裏口からゴルフ場を小走りに横切りながら授業を受けに行くのだが、いつも遅刻して、アメリカ人教師にもう1回遅刻すればE(落第)だと脅されたものだ。

この学生寮は1学年10名程度の所帯で、住人のほとんどが高岡高校出身者だった。多摩地区の大学だけでなく、都内のいろいろな大学に通っていた。だから、大学の情報はいろいろ集まってきた。私は団塊世代の最初の学年になるが、一級上の学年には実に優秀な人材が集まっていた。東大の数学・情報理論教授になった竹内郁雄や環境省事務次官を務めた炭谷茂も同じ寮の住人だったが、彼らは大学紛争にわれ関せずと勉学に勤しんでいた。この寮の住人ではなかったが、やはり高岡高校出身のこの学年には東大学生運動で名を馳せた人物がいる。河内謙策は駒場自治会委員長を務めた後、東大紛争時には法学部緑会委員長を務めていた。大学卒業後、出版社に勤めていたが、司法試験に合格して、現在は弁護士として活躍している。河内とともに本郷キャンパスの農学部自治会委員長を務めていた林良博も、やはり高岡高校のこの学年である。今は農学部教授になっている。高岡高校の名前が一躍注目されたのは、これらの秀才たちのお陰だ。もちろん、このような学生が自然に育ったのではない。60年安保を経験したカリスマ教師が途方もない影響力を与えてくれた。立て板に水の弁舌と明快な歴史解説は高校生の心を捉え、選択授業では教室をはみ出す受講者が集まるほどの名講義だった。富山県教育委員会は「左翼学生」を大量に輩出させた長谷川毅教諭を左遷し、進学校ではない小さな町の高校に隔離してしまった。いかにも地方の教育委員会がやりそうな仕打ちである。

私の学年はまともに大学紛争に巻き込まれた。ほとんどが各大学の自治会活動に参加していた。そういう噂が広がって、この寮に子供を入ると「赤に染まる」という風評が流れ、高岡市教育委員会は管理人(寮長)を交代させ、小学校校長経験者を派遣したが、何の

効果もなかった。新任の寮長は父の元同僚で、赴任早々、私にStudent Powerの意味を聞いてきたので苦笑いするしかなかった。寮では議論することもあったが、実際には寝に帰る場所か、麻雀で気を休める場所にすぎなかった。私の学年には富山県立大学教授になった宮田伸朗と弁護士で活躍している鍛冶富夫がいる。1級下の学年には一ツ橋大学に通っていた滝田修と頭川博がいて、専攻もテーマも違っていたが、一橋大学大学院で再び一緒になった。滝田は竜谷大学へ、頭川は高知大学へ赴任した。さらにAFSのアメリカ留学で1年遅れたために、2級下で寮に入ってきた角崎利夫は第二志望で国際基督教大学に合格したが、東大にも合格して、もちろん東大を選んだ。1998年のロシア危機勃発前に経済調査でモスクワを訪問した折、日本大使館の政治担当公使として赴任していて、懐かしい出会いとなった。カザフスタン大使を経て、この1月からセルビア大使としてベオグラードに赴任することになった。ブダペストとベオグラードで再会するのが楽しみだ。今から考えると、この小さな高岡市の寮に実にさまざまな人材が集まっていた。

国際基督教大学は2度の長期休校で、4年の在学期間中、実質3年しか大学に通っていない。大学卒業が1970年5月で、一橋大学大学院入学が1970年4月という履歴になっている。紛争当時は東大駒場キャンパスに通い、人気教授の授業を聞いて歩いた。国際基督教大学の長期にわたる紛争は友人関係をことごとく壊してしまったが、数少ない友人の中で、武田清子教授が顧問をしていた社会科学研究会「リベルテ」で一緒に読書会を主催していた森建資と2級下の保立道久はそれぞれ東大大学院に進学し、現在、森は東大経済学部で歴史・労働問題担当教授、保立は東大史料編纂所教授を務めている。2007年春に東京で30年振りに旧交を温めた。

話は1978年12月に戻るが、冬のハンガリーは暗かった。到着してすぐにクリスマスになったが、すべての店が閉まってしまったのに驚いた。とにかく物が無い時代である。ようやく探したレストランで「ステーキ」という文字を見つけたので注文したら、生のひき肉が出てきたので困ってしまったのを覚えている。しかし、春がきて明るい日差しを受けると、それまでの暗い印象が一変した。英語と日本語の専門書を50冊も持参して、それを片っ端から読むつもりだったが、それでは面白くないと思い始め、辞書を片手にハンガリー語の専門書を訳し始めた。ハンガリーには国際的に知られる数理経済学者が何人かおり、そのうちの一人がコルナイ・ヤーノシュだった。留学当時はコルナイに関心はなかったが、留学が終わる頃に、セッションを巻き起こした「不足の経済学」(Economics of Shortage)が出版された。それでコルナイ経済学のエッセンスを日本の学界に周知させることが、1980年代の私の仕事になった。昨年12月、コルナイは17年振りに3度目の日本を訪問した。神奈川大学の創立記念行事に招待され、東大・一橋大学・京大でも講演し、無事、ブダペストに戻ってきた。法政大学に招聘した1983年にはまだ56歳だったコルナイももう80歳を超えた。ノーベル経済学賞を獲得できるのかどうか。寿命との競争にもなっている。

1980年に留学を終えて大学にもどったが、最初のハンガリー漂着から10年経た1988年8月に、再び長期滞在することになった。カーダールが引退し、ハンガリー共産党(社会主義労働者党)に大きな変化の兆しが見られるというので、在ハンガリー大使館で最初の専門調査員として赴任することになった。当時のM大使は変わり者で、「俺が頼んで来てもらったわけではない。本省が勝手に送り込んだ人材だ。大学の先生など大使館には要らないから、俺は知らない」という態度で、無視を決め込んでいた。もともと、無視された方が気楽で、直属の部下にあたる公使初め、館員は皆、大使権限を振りかざす横暴に困っていた。赴任早々、H公使から「大使のことは適当

に受け流しておいてください。抵抗しても始まりませんから」と言われたのに驚いたが、確かに並大抵のことでは対抗できないような小独裁者だった。会議では最初から最後まで1人で喋りまくり、それで終わり。館員から良い提案があっても、すぐには返事せずに、何週間も待たせて承認するという手法をとっていた。どうでも良いことに拘って肝心なことは決めない(決められない)、子分だけを可愛がって能力のある人材を使いこなせない人は、本当の仕事はできないという典型例のようなものだ。

臨時の館員会議が招集される度に、今度こそ大使離任かと皆で期待したが、「陛下の容体を報告する。本日午前10時の体温、血圧、脈拍は、…。皆さん、何かの時に備えてください。以上終わり」という報告ばかりで、何度もがっかりさせられた。この時期の大使館はまるで戦前の天皇制国家に戻ったようだった。「昭和天皇崩御」に際して、大使から公邸の「御真影」への集団拝礼の指示がきたが、「思想信条に照らして私は参りせん」と大使に欠席を通知した。その時は突然のことでとくに意見はなかったが、後で「あれは赤だ」と陰口を叩いていたようだ。こういう人と「私が赤なら貴方は何様ですか」という議論をしても益はない。

この大使が離任していなければ、1989年に始まる大変動に日本大使館は対応できなかっただろう。1988年秋から1989年春にかけて急速に進行した政治的プロセスの詳細は、私の分析報告によって適時的に本省に伝えられた。今はカリフォルニア大学バークレー校でロシア研究所所長をしているベレンド・T・イヴァンは、この当時、ハンガリー科学アカデミー総裁を務めており、改革派の代表として中央委員会に出席していた。中央委員会で大激論が闘わされる状況になり、会議が終わる度に彼を訪ねて議論の内容を教えてもらい、それに分析を加えて政治報告をまとめた。大使の方は、自分が依頼してもいない政治分析報告を本省へ送付するのをためらった様子だったが、少なくとも本省からは感謝された。

幸い、1989年春にM大使の退官が決まり、能吏である関栄次大使と渡辺伸公使のコンビによって、ハンガリーの大激動期を乗り切ることができた。関大使より半年ほど早くサウジアラビア大使館からハンガリーへ単身赴任した渡辺公使とは毎日昼食を共にし、大使館の改革や移転などを議論し、M大使をどう説き伏せるかなどの戦術を一緒に考えたものだ。今となっては、これも懐かしい思い出になっている。

大使館時代に起きた中欧の歴史的大変動によって、私の人生も変わった。ジョージ・ソロスなどが支援する新政府への政策提言組織であるブルー・リボン委員会のファンディングメンバーに野村総合研究所を招聘した関係から、水口弘一社長と知り合う機会があり、法政大学を辞して野村総研に移り、1990年3月から再びブダペストに戻るようになった。

その後、渡辺伸さんはアルジェリア大使時代にすい臓がんが見つかり、若くしてお亡くなりになった。学究肌で真面目な渡辺公使のことは今でも忘れられない。渡辺さんの方が私よりもはるかに学者らしかった。

若くして命を落とすニュースに出会う度に、胸が締め付けられる。『異星人伝説』を翻訳出版して間もなく、米原万里さんが早速、「週刊文春」に書評を書いてくださった。当時の在京ハンガリー大使のセルダヘイ君が、ピーター・フランクルや吉川弘之学術会議会長を招いて大使館で出版記念会を開いてくれるというので、米原さんに招待メールを送った。米原さんをよく知る佐藤経明先生からのアドバイスだった。快く出席していただけるものと思っていたら、「そういうつもりで書評を書いているではありませんから、お気遣いなく」というそっけない返事がきた。佐藤先生には、「それも一つの見識だと思つので、これ以上誘うのは止めます」と彼女の返答を伝えた。その米原さんが癌を患っていることを佐藤先生から聞いていたが、そ

れから4年もしないうちにお亡くなりになった。作家としてこれから長く活躍できる才女だったのに、残念至極としか言いようがない。

『異星人伝説』の著者であるマルクス・ジョルジュ教授とも懇意にさせてもらった。ハンガリーを代表する原子物理学者で、かつ国際的に知られた物理学教育の推進者である。ハンガリー科学アカデミーで開いた日本語版出版記念会も、多くの学者を集めて盛大に行ったが、マルクス教授はすでに癌に冒されていて、何とか日本語出版が間に合った。しかし、邦訳の2刷がでた時にはもうお渡しすることができなかった。多くの人々に惜しまれ、ファルカシュ墓地で盛大な葬儀が営まれた。

2008年9月初め、インターネットのニュースを見て仰天した。草柳文恵さんが自殺したという。それも高層マンションのベランダから首を吊ったというのである。そういえば最近ではメディアで見かけないとは思っていた。乳癌で苦しんでいたようだが、発作的な自殺は薬の所為ではないだろうか。

北海道テレビの東欧取材で文恵さんがハンガリーを訪れたのは1989年11月初め。もう記憶が確かではないが、何かの伝で日本の制作会社から私に電話がかかってくる、取材のアテンドを頼むということだった。勝手にアテンドする訳にはいかないから、外務省の便宜供与を申請するように指示した。文恵さんは故草柳大蔵氏の長女で、青山学院の学生時代にミス東京に選ばれた才媛である。どれほどの才女なのか興味があった。ところが、ハンガリーに到着した翌日、彼女は腰痛で動けなくなった。痛風発作の症状によく似ていたが、とりえずテレビクルーは街の取材に出掛け、私は彼女をレーザー光線による針治療に連れて行くことになった。私もテニス肘やら痛風、持病の腰痛でいろいろ温泉治療を試しているところだったので、テルマルホテルで知り合った整形外科医の家まで連れて行った。治療を終え、TBSラジオの定時番組へ電話参加するために大使館に戻った。ハンガリーの報告をしなければならぬというが、一日中、バタバタして何も準備できていない。私が急いでテキストをまとめ、彼女はそれを復唱して生番組に備えた。放送を無事終えて、ついでに次週にワルシャワから放送する分のテキストも作成した。

原因不明の腰痛は翌日には嘘のように治った。大事をとって、その日も仕事を休み、テルマルホテルの温泉へ連れて行った。クルーは主役なしでハンガリー国境の撮影を終え、それから私のフラットに集合して、皆で夕食をとりながら「生オケ」パーティになった。古びたグランドピアノを借りていたので、歌謡曲や演歌などを弾いて盛り上がった。文恵さんは、「それでは私も一曲」とショパンを弾いてくれた記憶がある。最後の夜はオペラを見たいというので、「ボエム」のチケットを手配し同行した。クルーはオペラではなく、キャバレーへ流れたと記憶している。

数日の短い期間だったが、楽しい時間を過ごさせてもらった。「ミス東京」や「棋士との結婚」の話題は、週刊誌などで読んだ覚えがあった。「将棋指しと結婚したんですよね」という不躰な質問にも、「あー、真部さん？もう別れたのよ」という調子で会話が弾んだ。快活ではっきりした口調の物言いは今でも耳に残っている。その後、何度か電話で話をしたり、手紙をいただいたりした。見事な達筆であった。私は専門調査員の仕事を終えた後、しばらくして大学を辞めて、ハンガリーに舞い戻ったので、連絡が途絶えてしまった。私がかつていたあいつの文恵さんが自殺なんかするわけではないと思う。骨太で大柄な彼女の体が、骨と皮だけになっていたという記事も読んだ。闘病生活が苦しかったのか、人生が終わったと考えたのか。それにしても、あのような発作的な行為は薬の所為ではなのか。年老いて娘に先立たれた母上の心情を察すると、言葉もない。

父母や年長の友人・知人が次々に世を去っていくだけでなく、私よりも若い才女たちも急ぐように去っていく。これから追悼のことは認める機会が増えていくことだけは間違いない。合掌。



収穫の喜び チョメルからの便り

小松 裕文

『ドナウの四季』が発行されることになった。多くの活字媒体が電子媒体に移行したり、廃刊にされたりする今日この頃、活字媒体で育った筆者には嬉しい話だ。長く継続されるよう祈る次第だ。

現在の住まいはブダペストに隣接するチョメルという町。ブダペストを一望できる小高い場所にあり、庭の果樹園が気に入って購入した。

これから夏を迎えると種々な果物=リンゴ、チェレスニエ、メヅジ、モモ、洋ナシ、ブドウ、胡桃=が食卓ににぎわすが、現在は来るべき収穫期に備えて休養中。果物の収穫

の様子やそれを使ったジャムづくり、ワインづくりは本誌で随時紹介してゆきたい。チョメルの人口は8000人、行政上は市。グドウル丘陵地の西北部に位置しており、ブダペストに隣接しているとは思えないほど豊かな自然が広がっている。

ブダペスト・英雄広場からM0を20Km、車で30分の距離である。公共の交通機関なら地下鉄2号線(M2)オロシュ・ヴェゼール・テールから郊外バスまたはヘーブで30分の道のり。シシーが愛したグドウルの宮殿やF1レースの行われるフンガロリアは4~6Kmの距離である。

この町の唯一のレストラン・ゾルドファ=緑の樹=は知られざる穴場。炭焼きステーキが人気のメニュー。熱く熱した石の上で



牛肉、豚肉、鶏肉、七面鳥、フォアグラを好みの焼き方で焼いて特性のソースで食べるもの。一人前2500フォリント程度。ブダペスト市内の半分が三分の一程度の値段。一度試してみる価値はある

在留邦人紹介

広江昭久さん・ハンガリー生活36年

小松 裕文

現在の住まいはブダペストに隣接するチョメルにあることは別稿「収穫の喜びに」記した通りだが、この地を選んだ理由の一つは広江昭久さんがチョメルに住んでいたからである。

広江さんは36年前にヒナの鑑別師としてハンガリーで仕事を始め、日本人としては最も長くハンガリーで生活している一人である。2002年にはハンガリー在住30周年の記念パーティーを開き、150人の出席者から祝福を受けた。

広江さんはブダペストに住居を構え、加えてこの町はずれに牧場を所有している。1.5ヘクタールの土地に300平方のセカンドハウスで毎週末を過ごしている。ニワトリ、シチメンチョウ、アヒル、カモ、ホロホロドリ、ウズラなどの鳥類、馬、羊、やぎを飼



育。鑑別師の仕事でハンガリーや近隣のウクライナを忙しく飛び回る傍ら、牧場主としての経営にもあたっている。

広江家の料理で特筆するのは鳥料理。新鮮な鶏肉を使ったグヤーシ、ほろほろ鳥の刺身、ウズラの塩焼きは一度食べたら忘れられない味だ。

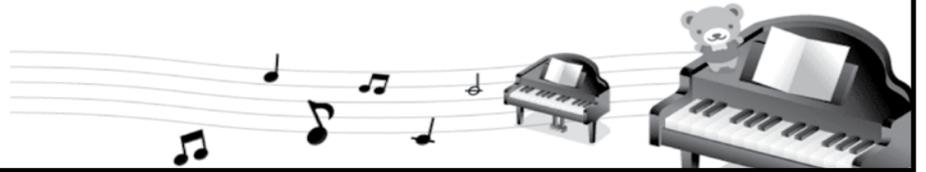
広江さんは鳥取県の出身。海外で仕事をするのが夢で、それを実現させる近道がヒナの鑑別師になることだった。名古屋にある初生鑑別師養成所を卒業し、その後2年間ペルーで仕事して、1973年からハンガリーで働き始めた。鑑別の仕事ができなくなったときのために、17年前新たな事業も始めた。牧場で飼育しているウズラの卵を燻製にし、「金の卵ちゃん」と名づけて高級ホテルやメトロ(スーパー)などに卸し、人気を集めている。

ハンガリー人のエリザベートさんの間には二人の男の子もがある。長男の友彦さんはネジコという会社を経営し、アルミシステム、パイプジョイントシステムの生産と組み立てや金型の製造を日本からの進出企業に提供している。次男の昭次さんは日本食堂を開くべき目下準備中である。2人とも日本での生活体験を持っており、2つの祖国を結ぶ役割も担っている。友彦さんは大相撲中村部屋に所属して、武双山とは同期。その経験を生かし、現在ハンガリー相撲協会の主要役員を務めている。昭次さんが滞在していたのは横浜の和食店。包丁一本の厳しい修行を経験した。

チョメルの冬は殺風景。樹木は葉を落とし、正に荒野。しかし春ともなれば、その荒野に花が咲き乱れ、アカシアの甘い香りの花が咲き誇る。一度広江さんの牧場を訪ねてみてください。ハンガリーの大自然を実感できるでしょう。

コンサート情報

桑名 一恵



《リスト音楽院留学生出演コンサート》

☆1月29日(木) 19:00 旧リスト音楽院
安田 恵子・柏原 佳奈・有木 美佳
ピアノコンサート
曲目:リスト:タランテラ、プロコフィエフ:4つの小品、その他

☆2月13日(金) 15:30 リスト音楽院大ホール
鈴木 玲子(クラリネット)
リスト音楽院卒業演奏会
曲目:モーツァルト:クラリネット五重奏曲
ポンキエツリ:2本のクラリネットとピアノの為の
'イル・コンヴェーニョ'
ウェーバー:クラリネット協奏曲第1番へ短調 その他。
ソモラ・ティボール・門野 由奈(ヴァイオリン)、
酒井 翔子(ヴィオラ)、八代 瑞希(チェロ)ヘルナーディ・ヒル
ダ(ピアノ)、サカーチ・ドモンコシュ(クラリネット)
指揮:ベルケシュ・カールマーン
友好年記念オーケストラ

☆2月27日(金) 19:00開演 旧リスト音楽院
香川 真澄(ピアノ)室内楽コンサート
曲目:ベートーベン:ヴァイオリンソナタ、
へ長調 Op.24、シューマン:ピアノ五重奏曲
変ホ長調 Op.44 その他。
酒井翔子、門野由奈(ヴァイオリン)
上杉典子(ヴィオラ)、山田晋吾(チェロ)

☆3月29日(土) 18:00 ナードルテレム
尾形 大介(ピアノ)コンサート
ブダペスト春の音楽祭期間中
曲目:リスト:巡礼の年、
オーベルマンの谷
ベートーベン:ピアノソナタ
ニ長調 Op.10-3
ブラームス:ホルン3
重奏 Op.40
共演者:ベニューシュ・ヤーノ
シュ(ホルン)

☆4月18日(土) 18:00
キシュツェリ博物館
スプリングコンサート
曲目:ショパン:ピアノ協奏曲1番 その他
柏原 佳奈(ピアノ)
友好年記念オーケストラ



《お勧めコンサート》

☆1月24日(土) 18:00
ハンガリー文化会館ラーコツツィーホール
友好年コンサート
曲目:オット・レジュー:友好年委託曲初演
モーツァルト:フルート協奏曲 二長調
早川 正昭:バロック風『日本の四季』
岩瀬 桐子(フルート)、ハンガリー国立オペラファイロニ
室内合奏団、友好記念年室内オーケストラ

☆3月6日(金) 19:00 ドナウ宮殿
ドナウ交響楽団 / イェガナ・アブンドヴァ
(ピアノ、アゼルバイジャン共和国)
指揮:中田 延亮 www.nobuakinakata.com
曲目:ブラームス:大学祝典序曲
シューベルト:交響曲6番
ラフマニノフ:ピアノ協奏曲2番



《会場案内》

リスト音楽院 / Zeneakadémia
VI. Liszt Ferenc tér 8. Tel.: 342-0179

旧リスト音楽院 / Régi Zeneakadémia
VI. Vörösmarty u. 35. Tel.: 322-9804

ハンガリー文化会/Magyar Kultúra Alapítvány
I. Szentháromság tér 6. Tel.: 224-8100

ドナウ宮殿/Duna Palota
V. Zrínyi u.5

ナードルテレム / Nádor Terem.
XIV. Ajtósi Dürer sor 39. Tel.: 344-7072

キシュツェリ博物館 / Kiscelli múzeum
III. Kiscelli utca 108. Tel.: 388-7817

《お知らせ》

今年の日本・ハンガリー友好年を記念いたしまして、日本人留学生及び両国に親交のある音楽家に声を掛けさせて頂き『友好年記念オーケストラ』が結成されました。スポンサー・後援・出張演奏依頼・年間会員など随時募集しております。是非サポートご協力お願いいたします。

お問い合わせ: Propart Hungary Bt(企画:桑名)
Tel: +36-1-7867846 / +3670-3815548
e-mail: propart@chello.hu

みどりの丘日本語補習校は2005年4月に開校して以来今年で4年目を迎え、試行錯誤を繰り返しながらも多くの皆様方にご協力いただき、この地で一貫して国語教育を推し進めてまいりました。2008年春には文部科学省から正式に補習授業校にも認定され、そういったことを励みに、ヴォランティアの運営委員、教師、児童・生徒が一丸となって作り上げてきた学校と言えるのではないのでしょうか。

しかし開校当初は全く予期しなかったような出来事や、子供達の日本語能力の違いからくる授業の難しさ、異動、帰国、転校他による児童数の減少、等々難しい運営を余儀なくされたこともありました。児童・生徒数の減少はそのまま運営していく上での「財政難」という大きな問題につながります。が、単純に学校を運営する上での必要経費を児童・生徒の頭数で割っていたら、授業料は児童・生徒の増減によって大幅に変動することになります。私たちはこれを避けるため常に一定の、可能な限り低い金額の授業料を設定し、そのための努力を惜しまずにやってきました。昨年秋に初めて試みた「補習校のオリジナルクリスマスカード」は、多くの皆様にご購入いただき、その収益金は大いに運営を助けてくれました。この春にはフリーマーケットを企画しましたが、これにも多くの皆様が出店して下さったりご来店下さったりで、その収益金も大いに役立たせていただいています。本当に補習校関係者一同心から感謝致しております。

補習校行事としては春から初夏にかけて授業参観を行ったり漢字検定受験を奨励したり、その後夏休みを挟んで9月には日本人学校と日本人会主催の運動会に参加させていただき、12月には学習発表会を行い、1月にはかるたとり大会、2月にはまた漢字検定受験、授業参観、3月には宿泊研修・・・というような流れで年間行事を組み込んでいます。

ハンガリーの学校の夏休みが6月中旬から始まるのを良いこと

に、この夏補習校から4人の児童が日本で体験入学してまいりました。我が家の2人の子供は、3週間半実家近くの小学校に通い、6年生の娘はいつも友だち数人と楽しく遊んだり、プリクラに行ったり、そうする中で「生きた小学6年生の会話」を身に付けました。4年生の息子は勉強だけでなく、夏休みになるとすぐコミュニティーセンターの囲碁クラブに通い、おじいちゃん先生方に可愛がられながら囲碁の腕を磨きました。私の内職の手伝いもよくしてくれました。体験入学の時のことはまたの機会に詳しくお伝えしたいほど、有意義と言えることが数多くありました。他の体験入学をされたお子さんも、「良かった。また是非体験入学したい。」と言われています。

みどりの丘日本語補習校

ラバイ里美
2008 春から冬

一方ハンガリーでも、この夏2年生の児童が日本人学校で聴講させていただき、このような貴重な機会を与えてくださった日本人学校の校長先生はじめ先生方に、心から感謝しております。

さて日頃の児童・生徒の様子ですが、みんなとても楽しく元気に学校に通っています。どの子も平日はハンガリーの学校やブリティッシュ・スクール等に通っていて、更には習い事もあったりでそれだけでも大変なのに、土曜日は元気に補習校に通っています。「宿題は嫌いだけど補習校は大好き！先生も友だちもみんな大好き！」というのは、我が家の娘の口癖と化した決まり文句です。補習校に通う子供達は、どの子も学校が好きなように見受けられます。そんな子供達が日本人学校の「ドナウ祭」の素晴らしさに感動し、自分達補習校も是非頑張ろう！と行なったのが先頃の学習発表会です。みんな限られた時間の中で先生方の指導の下、よく練習し、準備し、とても良い発表会に仕上げられました。こうした子供達の頑張っている姿をより多くの方々に見ていただき、皆様に補習校をご理解いただけることを、切に願ってやみません。

2009年4月、補習校は新1年生を迎えます。今後とも地域に根差した学校となれますよう、一同頑張りを続ける所存です。皆様の温かいご声援に感謝しながら・・・



運動サークル情報

テニス部

現在テニス部は以下3チームに分かれて活動中。

A、土曜日午後チーム(15:00～18:00) 部員9名

幹事:杉本

ヴァーロシュマリ・テニスコート

B、日曜日午前チーム(09:00～11:00) 部員23名

幹事:的場

夏季:ヴァーロシュマリ・テニスコート

冬季:マッチポイント・テニスクラブ(クレークコート)

C、日曜日午後チーム(16:00～18:00) 部員4名

幹事:石橋

夏季:セーブヴォルジテニスクラブ

冬季:ヴァーロシュマリ・テニスコート

<2008年度の活動報告など>

A、2面使用。参加者は毎回7名前後。30分のウォーミングアップの後、主にダブルスの試合形式をとった実戦練習。他チームとの交流戦。ハンガリー国内のアマチュア大会(バラトン湖)に1名参加。歓送迎会の開催など等。

B、2面使用。30分のウォーミングアップ後はA面で試合、B面で試合形式をとった基本練習(フォア、バック、ボレー、スマッシュ等)。参加者は毎回15名前後。夏に他部との交流戦を実施。ハンガリー国内のアマチュア大会への参加(4名)。プロのテニス試合(テニスクラシック)の観戦、送別会と言う名の飲み会など等。

C、テニス経験者を中心として活動中。日本ではOB会などが定期的に行われている老舗チーム。20分の練習後は休まず試合をする実戦派。他部との対抗戦も実施。

<2009年度の活動計画など>

A、実戦を中心とした練習。チーム内ペアマッチ。他チームとの交流戦(春・秋)。3都(ウィーン、プラハ、ブダペスト)対抗戦への参加。ハンガリー・アマチュア大会への参加。親睦テニス大会。新年会、送別会など。初級者から経験者に加え、会員外のスポット参加者も歓迎。

B、2009年度よりマッチポイント・テニスクラブを利用。基本をベースとした練習内容から、試合形式を中心とした練習内容とする。チーム内ペアマッチ。他チームとの交流戦。3都対抗戦への参加。国内アマチュア大会への参加。新年会、夏のビア・パーティーなど等。

C、他チームとの対抗戦。ウィーン対抗戦に参加予定。経験者でやる気のある方を求む!

釣り部

(1)2008年度の活動報告

今年は部員の入れ代わりが激しく、少数精鋭での活動となった。

4月上旬 トラウン川(オーストリア) 釣行3名

ブラウントラウト 1尾

5月上旬 エトラッハ湖(オーストリア)釣行4名

ニジマス 10尾

<別名:爆釣の湖>

アルプスイワナ 100尾以上

5月下旬 トラウン川(オーストリア) 釣行3名

ブラウントラウト 1尾、ニジマス 1尾

6月中旬 トラウン川(オーストリア) 釣行2名

ブラウントラウト 5尾、ニジマス 2尾

(2)2009年度の活動計画

6月上旬 エトラッハ湖(オーストリア)

ニジマス、アルプスイワナ

9月上旬 トラウン川 又は エトラッハ湖

ニジマス、ブラウントラウト他

10月 クロアチアでの海釣り

☆釣り部員を募集中です。2009年は春先に子供達を交えて、ブダペスト近郊での「コイ、フナ釣大会」を企画しています。

☆クロアチア、オランダ他、海釣りに関する情報をお寄せください。

⇒ 入部希望、釣り情報などは釣り部部長(谷川 浩明) 或いは本紙まで、

ランニング部

今年の主要なランニング大会は以下の通りです。

4月19日 ブダペスト T-Home Vivicitta

12km、6.5km、3.5 km

ウィーン 国際マラソン・ハーフマラソン・ジュニアマラソン(4.2km)

5月16日 女子フィットネス・ランニング 6km、3.3km、1.5kmx3)

5月30日 ジェネラリ・ドナウ沿岸道路レース(10km、5km)

6月7日 K&Hマラソン・ハーフマラソンリレー

(ジュニア2.1kmx3)

9月6日 NIKEブダペスト国際ハーフマラソン・リレー大会

10月4日 Sparブダペスト国際マラソン大会

10月18日 Coca-Cola女子大会(10km、リレー、3.5km)

それぞれの大会を目指して、練習しましょう。児童および父兄は学校でとりまとめます。個人は、morita@tateyama.hu まで申し込みしてください。なお、ウィーンの大会の申し込みは、以下のサイトで各自行ってください。<http://www.vienna-marathon.com/>。この大会へ参加するための詳しい内容は、盛田の上記メールで問い合わせください。

2008年度 日本人会ゴルフ部活動報告、成績結果

◎月例会

下段はGross <HCP> Net の順

於 Pannonia Golf & Country Club

回	開催日	優勝	2 位	3 位	
1	3月 30日	古川将人 (リョーフ) 98 <26> 72	栗原正毅 (スタンレー) 87 <17> 70	児玉佳久 (日清食品) 94 <19> 75	栗原選手初参加 計21名
2	4月 27日	兼村厚志 (ユーラシア) 101 <30> 71	松尾恵介 (伊藤忠) 95 <21> 74	山野井俊幸 (スズキ) 101 <24> 77	計28名
3	5月 25日	佐々木健 (ユーラシア) 86 <7> 79	宮崎好文 (日清食品) 92 <13> 79	柏木正明 (サンヨー) 107 <28> 79	柏木選手初参加 計17名
4	6月 29日	鉄 智明 (住友商事) 100 <24> 76	谷垣行広 (ユーラシア) 103 <26> 77	宮崎好文 (日清食品) 88 <10> 78	計28名
5	7月 27日	松尾恵介 (伊藤忠) 89 <16> 73	分田宗弘 (国際交流) 99 <26> 73	高濱吉廣 (東洋シート) 103 <24> 79	計14名
6	8月 24日	阿部隆司 (大気社) 91 <22> 69	高橋 洋 (伊藤忠) 100 <25> 75	星野譲司 (SEWS) 95 <17> 78	計24名
7	10月 5日	町野憲善 (スズキ) 92 <16> 76	山田 進 (クラリオン) 99 <20> 79	江森典雄 (ソニー) 94 <14> 80	計32名
8	10月 19日	谷垣行広 (ユーラシア) 93 <20> 73	星野譲司 (SEWS) 94 <15> 79	宮崎好文 (日清食品) 89 <9> 80	計23名
9	11月 16日	岡崎良仁 (SEWS) 97 <23> 74	谷垣行広 (ユーラシア) 93 <14> 79	児玉佳久 (日清食品) 96 <17> 79	(JAL杯) 計32名

◎第9回「大吉杯」ゴルフマッチプレー選手権

抽選で決まった対戦者のハンディキャップは、日本人会ゴルフ部の認定するハンディの差の8掛け切捨て。5月初旬から 8月中旬まで 3ヵ月半をかけて行われた。

優勝	辻 一則 選手	(SEWS ハンガリー)	HCP 5	初優勝
2位	島川幹臣選手	(関西ペイント)	HCP 9	決勝戦3度目の進出
3位	三宮 崇 選手	(大林組)	HCP 9	

◎第4回 JETRO CUP 四カ国対抗ゴルフ大会

9月28日、ウィーン郊外、Club Danube で開催された大会の結果。 参加 11組、41選手

<団体> 上位5選手の合計ストローク数		<個人>	
優勝:	スロバキア・チーム 440	優勝:	鷲頭 誠 選手 (スロバキア大使館)
2位:	チェコ・チーム 443	2位:	辻 一則 選手 (SEWS ハンガリー)
3位:	ハンガリー・チーム 466	3位:	後藤正司選手 (SONY スロバキア)
4位:	オーストリー・チーム 473		ベストグロス賞: 帆保克也 選手 (//)

◎第4回 WORLD CUP 四カ国対抗ゴルフ大会

過去最下位に低迷の日本チーム、奮起して準優勝!

優勝:	欧州選抜チーム
2位:	日本選抜チーム
3位:	アメリカ選抜チーム
4位:	韓国チームは今回不参加

2009年度 日本人会ゴルフ部 年間計画

3月～11月	月例会	
5月初旬～	第10回「大吉杯」ゴルフマッチプレー選手権	
夏(6月頃)	第5回 WORLD CUP 四カ国対抗ゴルフ大会	(欧州、米国、韓国、日本選抜)
秋(9月頃)	第5回 JETRO CUP 四カ国対抗ゴルフ大会	(オーストリー、チェコ、スロバキア、ハンガリー選抜)

インターネットで人生の楽しさを広げましょう! オトナももっと遊ぶ時代

人生に夢と輝きを BYOOL SNS ~The Best Years Of Our Lives~

BYOOL SNS (Social Networking Service)は、大人が楽しめるユーザー参加型のWEBサイトです。スマートな大人が集まるグローバルな知的空間を目指しています。現在、10ヶ国の海外に住む日本人が参加しており、国を超えて、文化や政治・経済始め、幅広い分野において、情報発信、議論を行なっています。あなたの知的好奇心を満たしてみませんか?

★参加方法：事務局まで参加希望の旨、メールをお願いします。招待メールをお送りします。

BYOOL事務局 Email: admin@byool.com 「BYOOL Bloggers」 <http://www.byool.com>

★お問い合わせ：上記事務局アドレスまでお問い合わせください。

日記・エッセイ



自分のページを持てる。
日記、エッセイ、ブログ、
記録として。

コミュニティ



同じ興味・関心を持つ
仲間の交流の場。
OB/OG会にも。

豊かさ・輝き



様々な人の意見・情報のシェア、
そこから生まれる新しい
発見や気づきが、
人生を豊かに輝きあるものに。

安心・安全



無料会員制。
SNSのメンバーだけが利用
できるクローズドなサービス
なので、安心安全。

書き込みはすべて非公開にできますので、スケジュール管理や、何か自分の記録をつけたり、コミュニティをグループの連絡用に使用していらっしゃるメンバーもいます。

BYOOL Selection

BYOOLでは、品質にこだわり抜いた無農薬・有機栽培の緑茶知覧茶・有機緑茶と、コクのある味わいの知覧茶・深むし茶を皆様にご紹介しております。

国内でも有数のお茶の産地として知られる鹿児島県知覧町の、全国茶品評会などのコンクールで、上位入賞経験を持つお茶園から、直接取り寄せました。環境に優しく、そして、人に優しいお茶で、心落ち着かす優雅なひとときをお過ごしください。 **BYOOL Selection:** <http://byool.open365.jp/>

さくら

DESIGN

CI、広告、ロゴ、ホームページ等
名刺1枚からご希望の言語にて
デザイン致します。

各種パッケージ、インテリアのデザイン、
内装工事、翻訳から印刷まで
幅広く受け承っております。
お気軽にお問い合わせ下さい。



SAKURA DESIGN: info@innerdesign.hu

Inner Design Group · 1021 Budapest, Bognár utca 7.

Tel/Fax: 1-200 3213 · Mobile: 06 20 480 4431

www.innerdesign.hu

Propart Hungary Bt.

各種コンサート企画・製作・国際交流イベントを
中心とした業務の運営。ハンガリーを拠点にグ
ローバルな企画・マネジメント展開を行って
います。お気軽に、御相談下さい。

- ・音楽企画/マネージメント
- ・若手音楽家の育成サポート
- ・国際交流事業企画運営
- ・留学/音楽研修サポート
- ・短/長期賃貸物件仲介
- ・各種通訳
- ・翻訳サポート
- ・買い/レンタルピアノ仲介
- ・輸入/輸出楽器仲介

ハンガリー国内出張演奏、
各楽器講師紹介なども随時承っております。

Propart Hungary Bt.

Address: 1089 Budapest, Kőrös utca 25. II/6

Tel&Fax: +36-1-786-7846

Mobil: +36-70-3815548

e-mail: propart@chello.hu

web: <http://propart.client.jp/>

Propart

コバケンと池田理代子 ヨーロッパツアー

7月8日

コバケンと理代子のトークと音楽の夕べ
ブダペスト・マリオットホテル(予定)

7月9日

ベートーベン「第九交響曲」
芸術宮殿バルトーク国民コンサートホール

7月13日

モーツアルト「レクイエム」
ウィーン・シュテファン教会



ソリスト:池田理代子、鈴木賀子
浅井隆仁、ムック・ヨーゼフ
合唱団:「真夏に第九を歌う会」
共演: MÁVシンフォニイ・オーケストラ
国立合唱団

チケット情報 : morita@tateyama.hu ☎ : +36-30-311-5361